



208  
2  
690

敵討女夫似我蜂  
上



国立国会図書館 敵討女夫似我蜂 3巻 208-690

ガラス使用



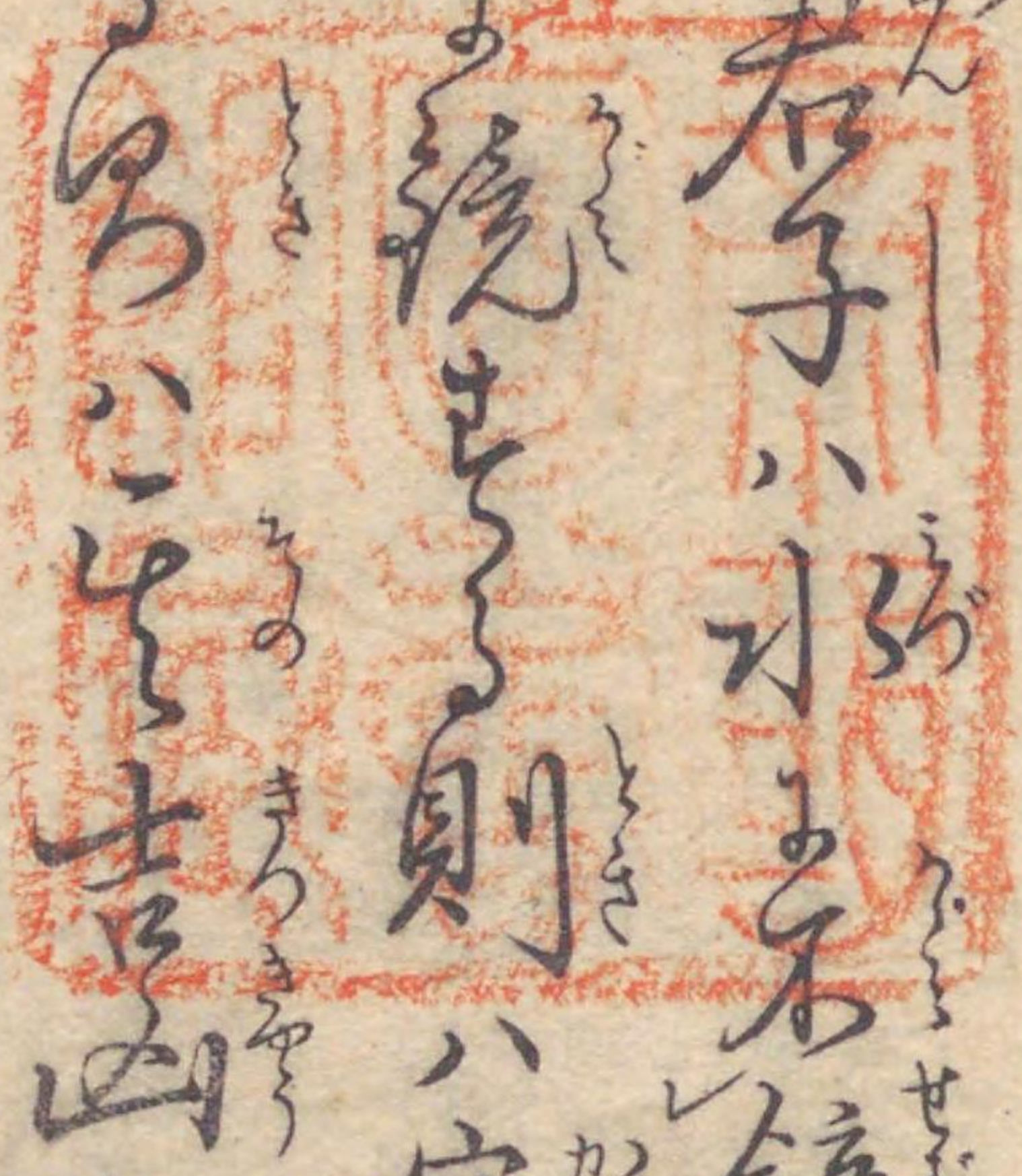
敵討女夫似我蜂

上

208  
2  
690



序  
 夫君子（れん）ハ小（せう）鏡人（せう）をまつて為鏡  
 有（あ）鏡（か）も則（すなは）ハ容（か）の面（か）鏡（か）人（か）の鏡  
 する男（おとこ）ハ其（その）吉凶（きうきん）を知らず（し）らば（し）よ（よ）き（き）ふ  
 似（に）よ（よ）あ（あ）ま（ま）ふ（ふ）似（に）ふ（ふ）か（か）ち（ち）ら（ら）ず（ず）也（や）此（こゝ）れ（れ）ま（ま）ぬ  
 む（む）ぬ（ぬ）事（こと）の（の）如（ごと）く（く）或（ある）日（ひ）書（しよ）肆（し）何（なん）某（な）小（せう）冊（さく）の  
 注（ちゆ）文（ぶん）と（と）し（し）つ（つ）る（る）事（こと）を（を）序（ぎよ）文（ぶん）と（と）





そよぶもわくは閑まは侍敵討の  
作者は骨頂南拙笑楚満人の人々  
を取分父の恩表もま山まこのり  
山入しそ似逐蜂の古葉はまの  
いちんもくもたけ流大木の  
根ら敵を討おせしは母の生  
茂里ト。大も流具の良材と  
母劇

鹿の角と持はまはるる  
こもこのれ名の本を  
誠や忠孝乃柱仁義の深禮智信  
の角物も持ててさる念力の  
礎巻中にある。鳴呼はる我の世よ  
流らんも。地祭は四神  
お進の四里四方。評判の音頭





城あげきりこけを運送し天長  
 地久のきりきり立も人も大極殿  
 と出ろふこ文化三年寅の正月  
 元日の吉書如も序文の異なり  
 まゝ者ハ本匠の棟梁  
 のきりきりきり  
 まゝの馬馬  
 すゝめ記之

敵討女夫似我蜂上  
 南仙笑楚満人戯作  
 享徳の比播磨の國主山名右衛門督政豊ハ佐用の莊  
 苔純水城子居任あつて都近き所まで一二の大名え  
 威勢盛んなり祖父山名左衛門督持豊入道ハ是が  
 嘉吉元年赤松満祐追討子搦手の大将とて武功を顯  
 一其恩賞に當園と賜り今政豊まで三代家富  
 豊りて郎等数多扶助一勢盛んありされは臣  
 碎城石舌頭害忠誠と故人の言む愈々るか取家  
 普代の家人子幸村逸見とら者あり生得心愚とて  
 大酒醉狂一人と人よせば身も死せざる奢と好

















おげし侍の手本とまぶき者あきこもき子として  
今の逸見いさりも武の道と知し飲酒色欲み耽る  
君より後よ知行もみろく奪よのきりぞ我意まよ  
して邪非我口ふまろく宿根家と失ひ身とにまぶき  
の北政よ露くろりかろ放埒の者を大切の娘は流るん  
おもよん但しそん豆平一内くそ中も強よんまよめ  
あつすドま上始志げさるるんお家何事すよん  
去年大鳥まろ即縁と結ぐんあろふも趣  
云出あふま産の命まろり都くとまろの事  
いまも有無と使せまろり一旦まろりけらた人

首屋せまろりいそもおの極めごり但し大あき  
縁をくハ維いある軽きあませよんまろり  
人わろりハ口入物まろりまろり三平ハ流るん  
まろり一も理まろりまろり家あもたろりなまろり  
一たんハあ世まろりせりなりおまろりまろりまろり  
でねまろりまろりまろり一が逸見ハ三平まろりまろり  
あいつあやまろりまろりまろりまろりまろり  
人婿十まろりまろりまろりまろりまろりまろり  
まろりまろりまろりまろりまろりまろり  
まろりまろりまろりまろりまろりまろり





いよ志がさくくふ 去る大島産の毒を  
今更悲しくは 伊勢の毒をさくく  
骨刺さぬも 毒の毒をさくく  
幸村力と毒をさくく さら今とハ  
けま 毒をさくく 伊勢の毒をさくく  
上京の毒をさくく 毒の毒をさくく  
毒にさくく 毒の毒をさくく  
毒をさくく 毒の毒をさくく  
娘志がさくく 毒の毒をさくく

熱酔の初をさくく 毒の毒をさくく  
おき君命をさくく 毒の毒をさくく  
小相とさくく 毒の毒をさくく  
在毒をさくく 毒の毒をさくく  
吉右郎とさくく 毒の毒をさくく  
女房をさくく 毒の毒をさくく  
ておきとさくく 毒の毒をさくく  
京都をさくく 毒の毒をさくく  
おハ 毒をさくく 毒の毒をさくく  
と偽り 毒をさくく 毒の毒をさくく









瀧見小十郎ハ大鳥を物とて考ふる事バ婿の夫  
せんと思ひ一は妻の命なりと云ふ事ありし  
中を好くいふ事と云ふ事ありし  
候よこそ一けふ志げきが弟小吉や俄に霍乱と  
る病をとりて一あ白若くもが醫家系統を  
たすれれば手におくる物を考ひておと  
いども甲斐又けり形の如く野を道とて  
の外他事取一を日とて立立心細く  
見ハけり思ふやう家改ふに向ふおびて二人の男  
と止ひぬく子孫絶せん先祖への不孝の事なり

主君への不忠なりは上の志げきを聲ぞうして  
の血脉と相續させんと心付被ふ事よと心の内  
擧ぐる事同家申若白言吾とらふ者の事なり  
源次ハ京都の屋補より育ち人果よく養明  
家づもよまねをとり若白ハ所望せし言吾も大  
悦び申す事ありし中法中遊見へ事ありし  
し字源次より志げきが家系よとて考へて  
しハ早稲智い主人へお願ひしに山名殿も  
が事とていひさだ心うく事らん充たる願ひ  
成行し事ありし吉日記撰し祝言とてとり



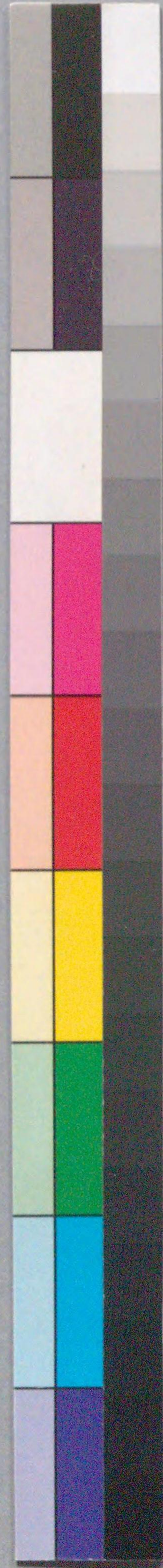




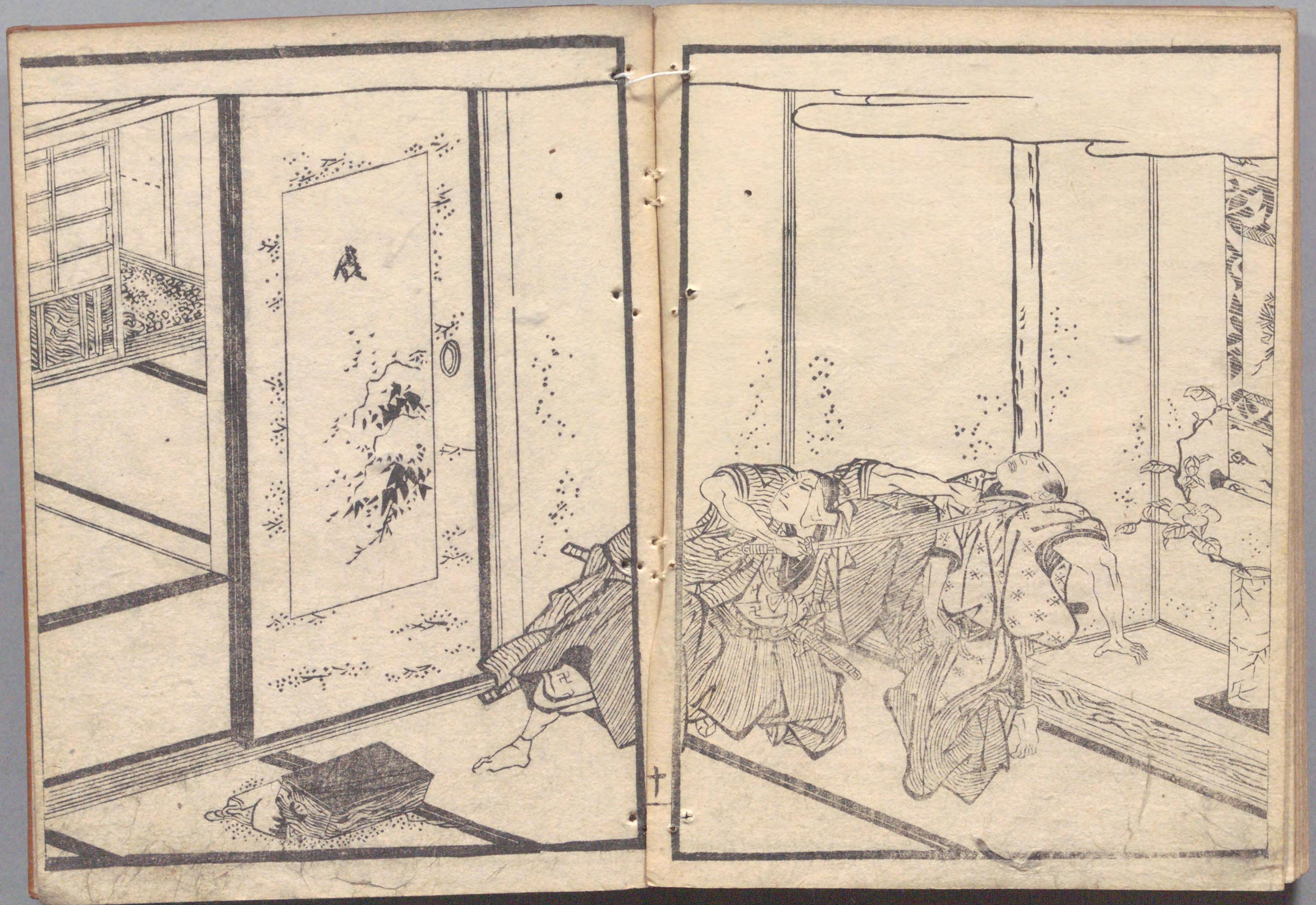


蹴る幸村眼くくしりもどし  
てつとさげさ小交通し  
三年ハ生園出羽しつとせ  
く獨の下入實地のふ城下  
時つりま立海りてあき  
集りさかむどしつとせ  
つり目付役人ま合け  
る事なれをし遊見  
とくをさるあ人若飯  
が死骸を改めし  
とせ道

たる疵左の脇腹胸板旭尾の下  
是は勢毛置まどし  
勿論は三年ハ至その  
媒約人又喧嘩口論の  
六ヶ交出入り  
た殿の馬耳入り  
のい足軽小頭  
荒くなむ傷  
成しよりその組下  
たる疵左の脇腹胸板旭尾の下  
是は勢毛置まどし  
勿論は三年ハ至その  
媒約人又喧嘩口論の  
六ヶ交出入り  
た殿の馬耳入り  
のい足軽小頭  
荒くなむ傷  
成しよりその組下













ほひ胎内の子とてかろふ大島が妻小梅八左衛門とて男あり  
んと候へた遊えが方の志がさし右の方を指おれをさしとて  
下へ口惜多きとて心をもみたりりる候へ今度京都御  
家より近國の兵士とてさし事者山名政豊も家の三郎  
等いづま及び領内の者法催促し主勢千七百餘騎  
上洛しつゝを候留まに古先の巨跡見申郎原三左衛門  
杉澤吉長而兵二百人とて跡をたらし居る六都の所倍何  
付れ今日打まん志なる小房をさし事者考あつた也心悔  
りきり及妻もさしとて殺さるや今度の上京合戦  
まごのめ形ねわわ分給ふとてさし一掃きの田は一も男と

産て男を産まのこころをさしつゝ志がさし八瀬園子おけ  
女の産産生死のさかむしつづきさる心細くをさし斗云々  
う海江が種といふをさしをさし武士の家子生  
てはあね別つたのめを推しおき者り大島と事とて  
も田と名ひあめあつた父の命のかりせえ心落しかきとて  
を形く身をさし者り何とてさし勇士の田がさし善信の形と  
川頼手もさしとて強く三出たるをさしをさし別れとて後で  
思ひあせたる抑今度都へ軍兵とてさしつゝのめ何とてこの  
者り云々今度大和紀伊の戦後共南朝の若宮とてさし  
よこれ風聞あり近國より江進せし將軍をさし在

















を患ひありて家もたれをいらいらとせしむるに  
て迎付者ありからしむ大鳥が方より嫁いふく迎ふ事  
友取とのもたれをいらいらとせしむるに  
脈のよりぬをす八時ありて立向ひ候へり  
やいへり平座より母子も何の患もなし  
あまの同く候きやと湯をあびせ男子あれた女子の  
いひ先もまのあくひりて嫁いふく迎ふ事  
只一もいふ合ふせに候へり  
ありて候えが方へり候の男の子とて  
子へり入る候へり又大鳥が方より女の子とて候へり

候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
幸村遠見も主命とて候へり候へり候へり候へり候へり  
婦中候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
源次少子ありかきめ候へり候へり候へり候へり候へり  
小あつ時守候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
良守候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
まへに候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
ハ斯波家より何の子細あり候へり候へり候へり候へり候へり  
ハ此家あり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
万の事候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり



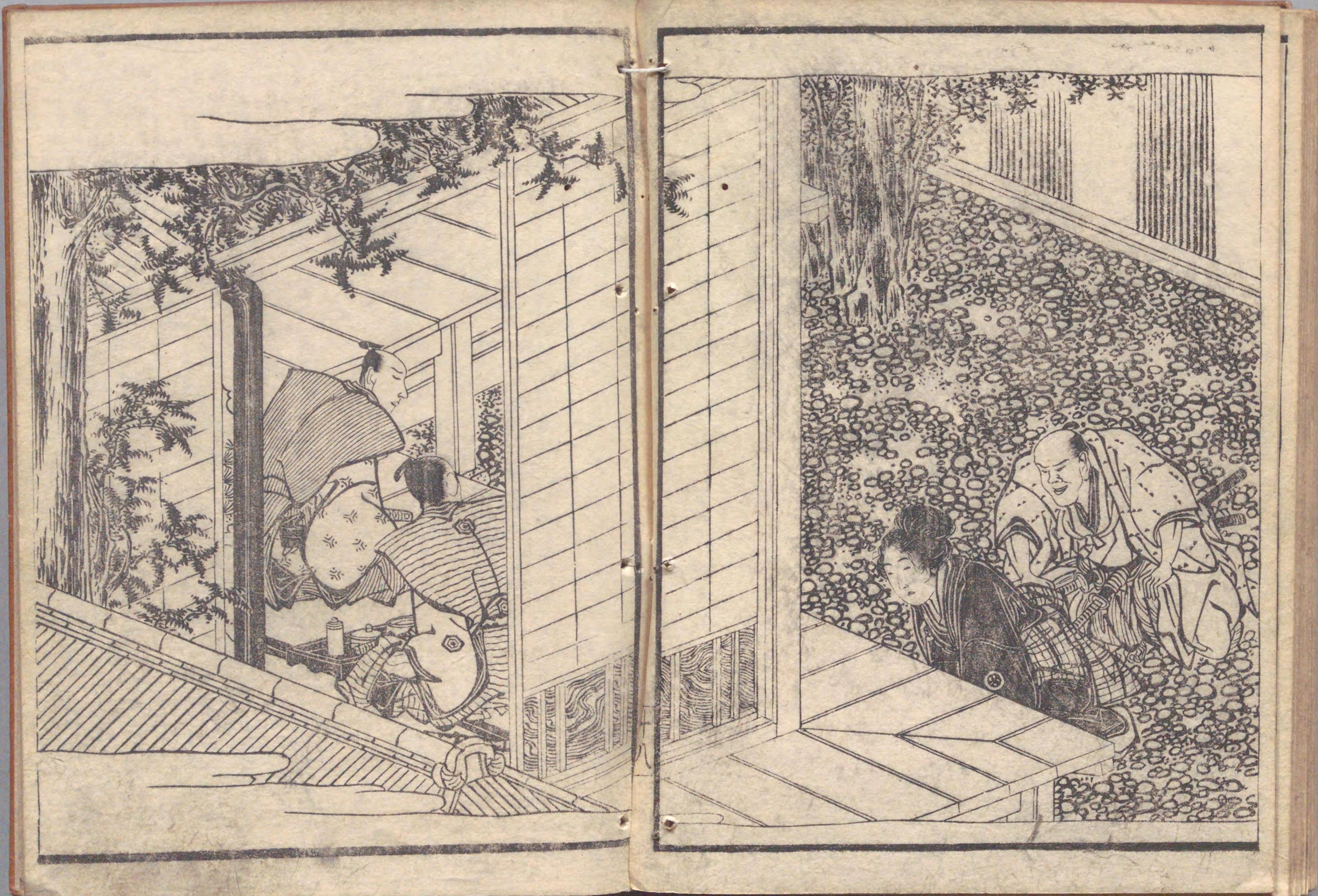


おのゝりもいふ人まを今度の只編者初ハ字原以る人  
家来子かおせを場と所をこゝろの系中の五沙汰之九  
かへけし斯波家之少人腹をみりし知る者ありと諺  
言きりなきはえ未政豊稔俊と好く別て斯波が中は  
更り深くかりたる有妻の乳一や字原以るまを之追  
わしめ字原途中あて家ハ流人の言きりしとてふ圖も  
かゝる越後と引出へ河内あけて小十郎はあふ人後  
切てお果るはさるるをせりて妻のまげさ大方なりべ  
きのつとも約束のこゝろ男子と考へて抱せよとびあ  
ふ顔とんしあふ心とおせしと命をたぬくをさるる

かりけりてさよ同途まよとていふもあはきとれん  
きり父の疑きありんるもせり引被て却るると小十郎  
持てく練めて思つる細あきハ疑きと止まらぬ一あはけハ  
そが名あんとせよとの見者一き物え集め一と案  
のこゝ瀧見小十郎永の内服りさるる急ぎま退へて  
京都より信越まき一ふ小十郎思ひ後しるるが  
教代の忠勤むき一若縄とま退きまはるる河  
内の園野合しと如きを趣るる大をまはるる政考の  
内前まのつゝ瀧見がまをさるる中なるるも  
殿の何ハ瀧見父子ハ不便らるる守りて士卒の見







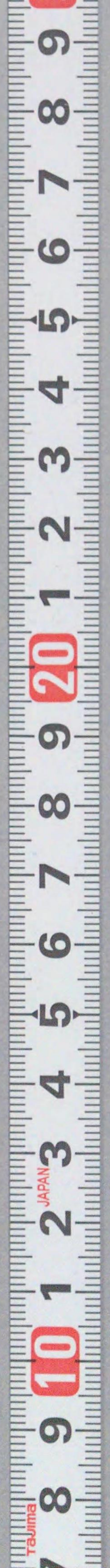






さうしなれど何事も思ひておぼせし者も  
下されば拾得し形も事なりしを中折る幸村逸見は公  
あつては役所も居ありせぬ方の上れるたきぶつりせ  
しう態し何事なき神しくしつれり大なるたつや  
辰月を擲ておろす形ひつれり去れりしもその上  
りてと年と報せし者も思ひあつてしとるも  
おぼせし者も思ひあつてしとるも思ひあつてし  
何れも思ひあつてしとるも思ひあつてし  
あはれし者も思ひあつてしとるも思ひあつてし  
改述の事しとるも思ひあつてしとるも思ひあつてし

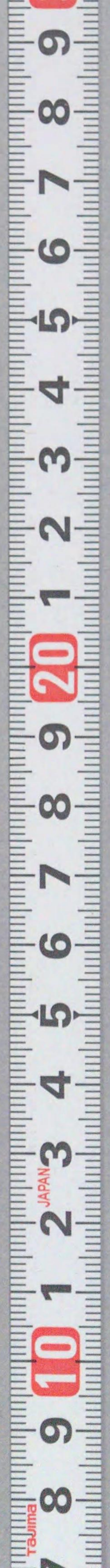
事の上便さよよはさげさつれりし者も思ひあつてし  
又ま向う大なるしつれりし者も思ひあつてし  
下女も思ひあつてしとるも思ひあつてし  
給事も思ひあつてしとるも思ひあつてし  
中と語りし小相も思ひあつてしとるも思ひあつてし  
幸村も思ひあつてしとるも思ひあつてし





百捕を携同しあひ是如く白状をなひるは口惜しき事  
たりし後世の歴史も毒と合ひ血中を移りてしり  
日以中悪友大島を遊ば人知れはらひ舞臺と使せん  
は大悪心と誘へ時をたて居りたる後を夫も  
妻も相立事ひふ都より事りし時を伯父より被  
後一様々の世話をしたる杉沢吉太郎が才は後ひ  
あり娘ののるるれ取持しき事客棧投書りたる  
客一室中の者も大寺原と娘の昔村も同仲交をせり  
酒量もろろけ指のあつた盆の敷きたる大寺の戸  
ありある人大酒を飲たるとして指ののりも大寺

酒を飲付し大寺原と知れはれぬの印  
酔して生席もなすりし時をふおけし大寺原  
お即し心持をばせりし事大寺原と娘の昔村も  
け中志しせしこと今年四つある大寺が娘をせし  
を能く流しし里にびもあつた舞臺と使せん  
酒を飲せし事大寺原と知れはれぬの印  
と獨然きひそに中庭より思ひ入る戸を押開く  
柿の葉が先づはさし入る旧の柿と葉をよき  
あつた大軒を風の吹くかの自告女は舞臺と使せん  
しき事大寺原と知れはれぬの印













の仕業とらふと知れどもおまひに遠見が刀と見つけ  
早と曲者の刀を打落し居り居出の少物  
あされとて怨角の言葉も出で死骸を印し抱き付  
泣くおのりお一杉海を刀とて是を見受あ  
持幸村遠見が刀をおき居り一敵に遠見あふが  
逐電せりお一杉海挿し出れ敵家の者も大勢幸村が  
家とておのりお入りの入るや落きては方志れを是  
非や立戻り居り居る中上守も早く幸村と見出  
百捕へ一と伝付れ大島が方一居三左衛門串形を捕  
と見分よせり居る百人入り死骸を改るかのり

山名殿の仰まよりく彦をゆか敵討に妻子も下  
伯父より由をきば杉海をゆか一は刃渡りあり杉海が  
所縁とおのりのをり居る一はのりあり杉海をゆか  
彦定一はゆり居り居る一はのりあり杉海をゆか  
もも彦定一はゆり居り居る一はのりあり杉海をゆか  
甚かよ百姓も居る一はのりあり杉海をゆか  
居せおのり居る一はのりあり杉海をゆか  
若縄と立玉涙をぐ河内を討つ心のも推し居る  
居る幸村遠見一人おまひ大勢討て居る  
く居ると思ひの外おまひ刀を打落し居る





208  
2  
690

敵討女夫似我蜂上終

我業<sup>ワガノ</sup>一<sup>ハ</sup>か<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>わ<sup>ワ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>コト</sup>一<sup>ハ</sup>捕<sup>ツ</sup>れ<sup>レ</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>コト</sup>一<sup>ハ</sup>急<sup>イ</sup>ぎ<sup>ギ</sup>家<sup>イ</sup>家<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>海<sup>ウミ</sup>へ<sup>ヘ</sup>た<sup>タ</sup>く<sup>ク</sup>入<sup>イ</sup>る<sup>ル</sup>金<sup>カネ</sup>子<sup>コ</sup>を<sup>ヲ</sup>共<sup>ニ</sup>し<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>一<sup>ハ</sup>懐<sup>ハ</sup>中<sup>ナカ</sup>一<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>跡<sup>アト</sup>を<sup>ヲ</sup>も<sup>モ</sup>ろ<sup>ロ</sup>い<sup>イ</sup>ど<sup>ド</sup>若<sup>ニ</sup>婦<sup>メ</sup>と<sup>ト</sup>迹<sup>アト</sup>を<sup>ヲ</sup>も<sup>モ</sup>ろ<sup>ロ</sup>い<sup>イ</sup>ど<sup>ド</sup>東<sup>トウ</sup>國<sup>クニ</sup>を<sup>ヲ</sup>一<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>下<sup>シ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>



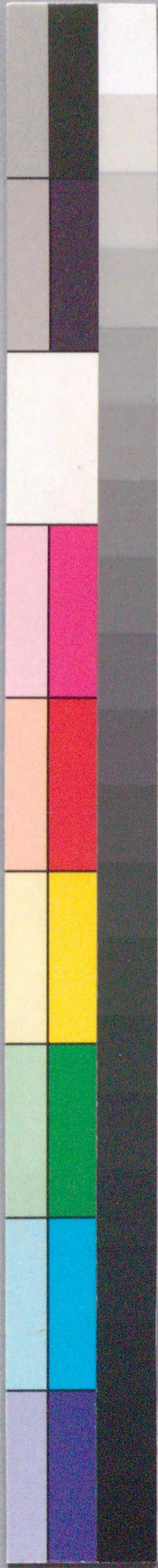


208  
2  
690

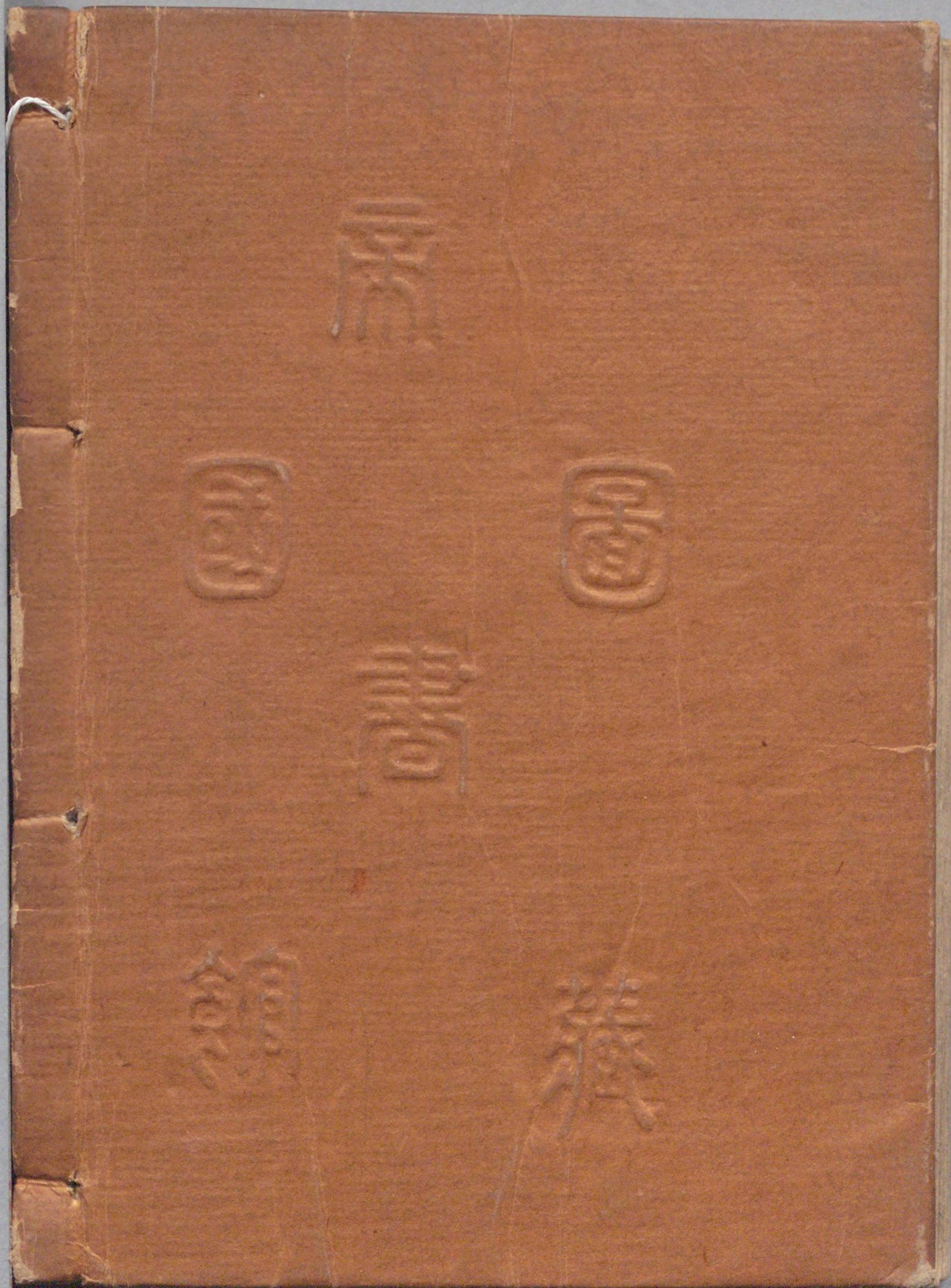
敵討女夫似我蜂 3巻 208-690







国立国会図書館 敵討女夫似我蜂 3巻 208-690



ガラス使用

